

らい じ さい 頼家時祭における親族からの 供物食品贈答と参加状況の変遷

お だけ
 小竹佐知子¹⁾・大久保恵子²⁾

¹⁾ 日本獣医生命科学大学 食品工学教室

²⁾ 元大妻女子大学

要 約 江戸後期広島藩の儒者として活躍したらいしゅんすい頼春水（1746～1816、延享3～文化13）邸で行なわれた時祭（四代前までの祖先および始祖をまとめて祭る）には、弟達二人、姻戚4家、廃嫡子、叔父、妻実家からの供物食品贈答があった。各家の事情によって、贈答の頻度や食品内容は異なったが、血縁のあった弟達、廃嫡子、叔父家庭では、供物贈答の習慣が次世代に継承されていた。また婚家では、嫁いだ本人が没したのちも、婚家からの贈答が継続的に行われていた。供物贈答とともに、時祭当日に祭りに参加するほかに、前日に準備を手伝う、翌日に後片付けをするといったことも行なわれており、これも、次世代に引き継がれていた。

キーワード：儒家祭、時祭、供物献立

日獣大研報 63, 27-39, 2014.

らい じ さい 頼家時祭供物献立¹⁻³⁾ は、江戸時代後期広島藩儒として活躍したらいしゅんすい頼春水（通称 弥太郎、あざな字 伯栗またはせんしゅう千秋、いみな諱 惟寛または惟完、春水は号、1746(延享3)～1816(文化13))⁴⁻⁷⁾ およびその孫で嗣養子の頼聿庵（通称 余一、字 承緒、諱 元協、聿庵は号、幼名は都具雄、1801(享和元)～1856(安政3))⁴⁻⁷⁾ が中心となって書き残した資料で、原資料は頼山陽史跡資料館（広島県広島市中区袋町5番15号）にて、らい頼家資料を示す「杉の木資料」の一部として所蔵されている⁸⁾。時祭とは四時祭の略で、儒教に基づいて祖先を祭る儀式を指し、高祖父母－曾祖父母－祖父母－父母の四代および始祖を対象として祭る⁹⁾。時祭は儒者が自らの家で行なう家祭行事の中で最も重要なもので、春分・夏至・秋分・冬至の四時を祭日とするのが一般だが、春分と秋分のみ行なうこともあった¹⁰⁾。

春水は商家に生まれたものの、父亨翁（通称 又十郎、諱 惟清、亨翁は号、1707(宝永4)～1783(天明3)）が教育環境を整えたこともあり、大坂の詩社「混沌社」で過ごしたのち、36歳の時に広島藩儒として登用された。これは、春水を遡ること4代前の高祖父が、武士として関ヶ原の戦いに従軍したものの、その後商家となった頼家にとって、ようやく武家階級への振り返りを果たしたことを意味する¹¹⁾。春水が武家の一員として生活を開始する前日から日記をつけ始め^{12,13)}、儒者生活の記録を遺したことは前報¹⁴⁾にて示したところである。藩儒となった春水は、自家家祭行事の構築にも力を入れ¹⁵⁾、春季と秋季（それぞれ春饗および秋饗）の年2回の時祭を行うことを決めた^{16,18)}。

前出の時祭供物献立はその記録であり、江戸後期の藩儒家

祭行事の貴重な資料と言える。

らい頼家の時祭が、春水だけでなく、二人の弟達、姻戚の者達からの食品贈答による供物を供えて執り行われていたことを筆者らは既報^{19,20)}にて報告した。本稿ではこれら供物贈答の協力者たちが、時祭開催初期からどのようにかわって来たかの変遷をたどることにより、江戸後期の一儒者の家祭執行の状況を浮き彫りにすることを目的とするものである。

分 析 方 法

既報^{19,20)}の春饗および秋饗それぞれ33回分と、時祭定着までに執り行われた特殊祭礼9回分のらい頼家時祭供物献立を調査資料とした。資料は、広島頼家10代つとむ惟勤氏（1921～1999、大正10～平成11、お茶の水女子大学名誉教授）が整理して760～763系と割り振った資料の中に含まれる²⁾。全資料の献立末尾に記載されていた到来品のうち、らい頼家親族からの食材および製品の種類と数を、経年ごとに集計調査した。さらに、『春水日記』^{12,13)} および春水妻の『梅廳日記』^{13,21,22)} に記載された時祭開催前後の親族らの動向を調査し、時祭祭礼への参加や、祭礼後の饗応に与った状況、また、前日あるいは後日の準備や片づけにどのようにかわったかを明らかにした。なお、血縁関係の記述は、ことわりがない限り、春水からみた続柄を示すこととする。また、日付表記は年/月/日、または月/日とし、各人の年齢は数え歳によるものを表記した。

結果および考察

1. 頼家親族

頼家親族は 10 グループに分けることができ (①～⑩), 各親族からの贈答食品について, 時祭供物に使われた品を経年に従って表 1～5 にまとめた。親族の内容は, 春水の

弟二人次弟春風宅 (①, 表 1) と末弟杏坪宅 (②, 表 2), 姻戚関係 4 家 (表 3, 到来品数の多い順に③進藤彦介, ④駒井数馬, ⑤寺川宅, ⑥加藤定斎), 廃嫡子山陽宅 (⑦, 表 4) およびその他 (表 5, ⑧いとこ養堂宅, ⑨妻梅颯実家, ⑩三原頼兼) である。以下に, 各親族の動向と, 供物食品贈答ならびに祭への参加状況の変遷を見ていく。

表 1～表 5 の記号類はすべて共通である。

献立について

■ 供物献立無し
重 重複献立の一方に掲載

到来品について

● 到来品
▼ 『梅颯日記』記述から判明した到来品
▽ 『梅颯日記』記述から推定した到来品
△ 『頼山陽書翰集』に記載された到来品
手 手製品

時祭前後の参加状況について

□ 時祭前日に準備のため春水宅訪問
泊 時祭前日に準備のため春水宅訪問してそのまま宿泊
■ 時祭当日に春水宅訪問
泊 時祭当日に春水宅訪問してそのまま宿泊
◇ 時祭翌日に後片付けのため春水宅訪問
☒ 時祭前後に春水宅連泊
準 同居家人として前日準備
参 同居家人として当日参加

献立内容について

膾 膾および猪口
向 向詰
取 三献取肴
菓 菓子

姻戚関係について

↑ 民の嫁ぎ先は不明
↑↑ 皇の実家寺川家は広島藩京都留守居役, 藤之進は養嫡子
↑↑↑ 加藤定斎妹の恭子 (= 玲瓏子) は天明 7/1/7 杏坪に嫁ぐ, あやはもう一人の妹で駒井数馬の妻

- a 『梅颯日記』あるいは供物献立における記述
- b 別称竹原鮓
- c 時祭日までの日数
- d 時祭当日は不参加だったが 9 日前の 2/20 に春水宅訪問
- e 春風の諺
- f 献立項目欄取肴に竹原鮓と表記され, 到来品欄では菱鮓と表記されたもの (菱鮓の誤記とも推定できるが不明)
- g 献立項目欄取肴に竹原鮓と表記され, 到来品欄では贈り主名が不明のものだが, 春風宅からの到来品と推定した
- h 2/27 広島着→2/28 春饗→3/9 竹原へ帰帆
- i 2/21 竹原乗船→2/23 広島着→2/29 春饗→一旦竹原に戻った後広島に来て同居
- j 2/11 広島着→2/19 春水忌日→2/29 春饗→同居
- k 前日に届く
- ℓ 南園中所産
- m 2/25 杏坪宅時祭の供物を貰う→2/29 春水宅春饗
- n 2/9 広島着→2/28 春饗
- o 1/20 大坂発送→1/24 広島着→2/28 春饗
- p 不参加のために前日に届く
- q 前日に届く
- r 『梅颯日記』時祭前日に「いちじく, 駒井」と記されていたが, これは供物には使用されなかった
- s 『梅颯日記』記載日を広島着日とした
- t 山陽後家梨影からの到来品と推定
- u 『梅颯日記』では「益寿丹くハシ」と記されていたが益寿糖を指していると推定した
- v 8/21 広島着→8/25 時祭→9/2 竹原帰帆
- w 加藤家へ嫁したと推定
- y 1/24 大坂発送→2/13 広島着→2/25 春饗

表 1. 春水弟達からの到来食品と時祭参加状況（次第 春風）

① 春風宅【竹原】／嗣養子 尚平																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																								
春 饗										秋 饗										特殊祭礼				異動 業務 その他の 出来事																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
西 暦	和 暦	来 食 品 数	2 酒 平 取	2 山 芋 平	2 椎 茸 平	各1 計10 食 品 名	贈 り 主 名	参加状況 ^a				来 食 品 数	17 鮎 汁 ^b	2 鮎 汁	各1 計7 食 品 名	贈 り 主 名	参加状況 ^a				計1 食 品 名	贈 り 主 名																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
								春風	妻 順	子 権 次 郎	孫 喜 六						春風	妻 順	子 権 次 郎	孫 喜 六																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
1790	寛 政	2																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						

1816/2/19
春水没
(71歳)
7人扶持
生涯
御医師格へ

1843/12/9
梅岡没
(84歳)

表2. 春水弟達からの到来食品と時祭参加状況（末弟 杏坪）

[illegible]

表3. 姻戚関係からの到来食品と時祭参加状況

(続く)

③													④													
進藤彦介(長女三穂の夫)【広島】													駒井数馬(いとこ民の夫)【広島】 [†]													
西暦	和暦	春 饗					秋 饗					特別	春 饗					秋 饗								
		到来食品数	5 鮑	2 さざえ	各1 計6	贈り主名	参加状況 ^a 娘三穂 彦介	到来食品数	12 柿	各1 計2	贈り主名		参加状況 ^a 娘三穂 彦介	到来食品数	2 ひえ鳥	2 干菓子	各1 計5	贈り主名	参加状況 ^a 民 数馬	到来食品数	4 柿	2 ひえ鳥	2 干菓子	各1 計2	贈り主名	参加状況 ^a 民 数馬
1790	寛政	2																								
1791		3																								
1792		4																								
1793		5																								
1794		6																								
1795		7																								
1796		8																								
1797		9																								
1798		10																								
1799	享和	11																	■	■						
1800		12																	■							
1801		1																								
1802		2																								
1803		3																								
1804		1																								
1805		2																								
1806		3																								
1807		4																								
1808	5																									
1809	文化	6																								
1810		7	1			蒸菓子(菓)	進藤氏	■	□	1		東瓜(取)	吉之助	■												
1811		8																								
1812		9	1			茶巾餅(菓)	進藤吉之助	■	□	1		●	進藤		□											
1813		10	1			餅菓子(菓)	進藤吉之助	■	□	1		●	進藤													
1814		11										1	●	進藤氏												
1815		12										1	●	進藤彦介	□											
1816		13																								
1817		14																								
1818	文政	1										1	●	進藤彦介	■	□										
1819		2										1	▼	進藤	■	泊										
1820		3	1		●		進藤	■	□																	
1821		4	1	●			進藤彦介	■	□	1		重		進藤	■	泊										
1822		5	1	●			進藤	■	泊																	
1823		6	1	●			進藤	■	泊																	
1824		7	1			玉子(平)	進藤	■	泊	1	●		進藤彦介													
1825		8	1	●			進藤彦介	■	泊																	
1826		9																								
1827	天保	10	2	●		白折(茶)	進藤				1	●		進藤												
1828		11										2	●	喜撰(茶)	進藤	■										
1829		12																								
1830		1																								
1831		2																								
1832		3																								
1833		4																								
1834		5																								
1835		6																								
1836	天保	7	1	●			進藤																			
1837		8																								
1838		9	1			いたら貝紅	進藤作左衛	■																		
1839		10																								
1840		11																								
1841		12																								
1842		13																								
1843		14																								
1846		弘化	3																							
平均		1.1						1.1						1.0						1.1						
全到来食品数		13					14					9					10					19				

[illegible]

表 4. 廃嫡子山陽からの到来食品と時祭参加状況

⑦

山陽宅 1811年～【京都】

		春 饗				秋 饗				特殊祭礼				輸送状況 ²⁰⁾										
西 暦	和 暦	2 到来 食品 数	慈 姑 平 取	各1 計10		贈り 主名	参加 状況 a	2 到来 食品 数	各1 計4		贈り 主名	参加 状況 a	計1		贈り 主名	参加 状況 a	京都⇒広島							
				食 品 名					食 品 名				食 品 名				食 品 名		山陽 発送 日	輸送 日数	広島 到着 日 ⁴	到来～時祭 までの 経過日数	時祭 日	発送～時祭 までの 総経過日数
																			A	A～B	B	B～C	C	A～C
1790	寛 政	2														参								
1791		3																						
1792		4																						
1793		5																						
1794		6					参																	
1795		7										参												
1796		8										参												
1797		9																						
1798		10																						
1799	11																							
1800	12																							
1801	享 和	1																						
1802		2																						
1803		3																						
1804		1																						
1805		2																						
1806		3																						
1807		4										準												
1808		5																						
1809		6																						
1810	7																							
1811	文 化	8																1811(文化8)/閏2/6京都へ (32歳)						
1812		9																						
1813		10																						
1814		11																						
1815		12																						
1816		13																						
1817		14																						
1818		1																						
1819		2																						
1820	文 政	3	2	白雪(酒)△ 羊羹(菓)	京													1/28	12日間	2/11	15日間	2/26	27日間	
1821		4																						
1822		5	4	塩饅(取)▼ 白菊(酒)▼ 小倉野(菓)▼ 喜撰(茶)▼	京都													不明	—	2/12	17日間	2/29	—	
1823		6	2	▼正喜撰(茶)▼	京													不明	—	2/23	6日間	2/29	—	
1824		7	1	茶▼	京都													2/ 3	19日間	2/22	7日間	2/29	26日間	
1825		8	1	●	京都			1	小倉野(菓)△▼	京師								7/23	8日間	8/ 1	24日間	8/25	32日間	
1826		9											大坂虎屋 唐菓子(菓)	京										
1827		10						1	煉羊羹(菓)▼	京								7/27	22日間	8/19	6日間	8/25	28日間	
1828		11						1	葛粉▼	京								7/12	19日間	8/ 2	29日間	9/ 1	48日間	
1829	12	1		剣菱(酒)	京	□																		
1830	天 保	1																						
1831		2																						
1832		3																1832(天保3)/9/23没 (53歳)						
1833		4																						
1834		5																						
1835		6																						
1836		7						準	1	州浜(菓)▼	京都							8/10	7日間	8/17	8日間	8/25	15日間	
1837		8						準				参												
1838		9	1		益寿糖(菓)▼	京都頼												2/ 8	12日間	2/20	8日間	2/28	20日間	
1839	10						準				准													
1840	11																							
1841	12																							
1842	13																							
1843	14																							
1846	弘化	3																						
平均		1.7						1.0																
全到来 食品数				12					4			1												
									17															

1816/2/19
香水没
(71歳)

1843/12/9
梅隠没
(84歳)

1816/2/19
香水没
(71歳)

1843/12/9
梅隠没
(84歳)

表 5. その他親族からの到来食品と時祭参加状況

⑧ 頼 養堂宅(いとこ, 別称 海禅丁)【竹原】													⑨ 梅颯実家【大坂】			⑩ 頼兼【三原】		
西 暦	和 暦	春 饗				秋 饗				特殊祭礼			春 饗		春 饗			
		到来 食品 数	各1 計7 食品 名	贈り 主名	参加状況 ^a 伝五郎からの続柄 妻とよ 孫常太郎	到来 食品 数	2 計1 食品 名	贈り 主名	参加状況 ^a 伝五郎からの続柄 妻とよ 孫常太郎	0 贈り 主名	参加状況 ^a 伝五郎からの続柄 妻とよ 孫常太郎	到来 食品 数	3 干 蕪 膏 汁	贈り 主名	到来 食品 数	計1 食品 名	贈り 主名	
1790	寛 政	2																
1791		3																
1792		4																
1793		5																
1794		6			■													
1795		7																
1796		8																
1797		9																
1798	政	10				没				没								
1799		11					w			w								
1800		12	1800(寛政12)/9/12 叔父伝五郎没															
1801		享 和	1			没				没		没						
1802	2																	
1803	3																	
1804	1																	
1805	2												1 ▼ 大坂篠田より来					
1806	3												1 ● 大坂					
1807	4																	
1808	5																	
1809	文 化	6				没			没			没						
1810		7																
1811		8																
1812		9																
1813		10											1 ● 大坂篠田剛蔵					
1814		11																
1815		12							■	■							1816/2/19 香水没 (71歳)	
1816		13																
1817	14																	
1818	政	1					1 ●		海禅丁		■	■						
1819		2					1 ●		戒善丁		■	■						
1820		3				■					■							
1821		4	2	蕨(取) 木の芽(取)	海禅		1	饅頭(菓)	海禅		■					1	蒸菓子 (菓)	三原頼兼
1822		5																
1823		6																
1824		7	1	蓮根(取)	海禅巷	■												
1825		8	2	蔞(汁) 山芋(取)	海禅巷													
1826	天 保	9										■	■					
1827		10																
1828		11				■												
1829		12																
1830		1																
1831		2																
1832		3																
1833		4																
1834	5																	
1835	6																	
1836	7																	
1837	8										■							
1838	9																	
1839	10																	
1840	11																	
1841	12	1	羊羹(菓)	海禅丁														
1842	13																	
1843	14				■													
1846	弘化	3	1	慈姑(取)	海善丁												1843/12/9 梅颯没 (84歳)	
平均		1.4					1.0								1.0			
全到来 食品数			7				3							3		1		
							10							3		1		

2. 次弟春風

春水の7歳年下にあたる次弟春風（通称 松三郎、字 千齡、諱 惟彊、春風は号、1753(宝暦3)～1825(文政8)）は、郷里竹原にて医師として開業し、春風館と称した自宅あるいは郷塾竹原書院で地域商家の子弟の教育にあたった^{4,7,11,23)}。春風が竹原の地で自らの生活を打ち立てたのは春水が藩儒となるよりも早く、1766(明和3)年に14歳で大坂の儒医古林見宜^{ふるばやしけんぎ}入門後、1773(安永2)年21歳のときには郷里竹原で開業、さらに1780(安永9)年には家業の塩田経営にも携わった^{4,7)}。この時春水はまだ大坂の地に居り、春水が藩儒として採り立てられたのと同じ年の1781(天明元)年に、春風は春風館を建築している^{4,7)}。

時祭を開催する際に春水は、「親類縁者の都合がよく、竹原からの渡航予定の合う日を相談して」¹⁶⁻¹⁸⁾ 日程を決めていたものの、広島春水邸の時祭に春風が参加したのは、時祭供物の記録が始まってから春風没年(1790～1825、寛政2～文政8)までの36年間で3回のみにとどまっていた(表1、1790(寛政2)年特殊祭礼、1797(寛政9)年春饗、1811(文化8)年秋饗)。これは、竹原からの船便を勘案して時祭日を決める心づもりをしていた割には少ないといつてよい。医師としての業務のほか、塩田家業および地域子弟の教育と、竹原での春風の日常はかなり忙しいものであったと推察される。

3回のうち初回の参加は、1790(寛政2)/8/25の特殊祭礼の時、これは春水が藩から賜った邸(杉の木小路^{しょうじ}と呼ばれていた武家屋敷地内の邸)²⁴⁾にて祠堂の完成披露を「安置一祭」と銘打って行なった祭であった。祠堂とは儒者が家祭を行う正式な場所で、頼家にとって喜ばしい祠堂の完成を祖先に報告する祭に、春風も参じたということである。この時、竹原からは春風と一緒に、義叔母とよ、いとこの養堂^{なな}と民が8/21に広島に着船し、祭に参加した(表5)。後述するように、末弟の杏坪は春水邸に同居していたので、この祭には3兄弟が揃い、また、一族の郷里である竹原の親類たちも参集したのであった。この祭以降、供物献立の記録が残されるようになり²⁵⁾、頼家の祭礼の形が整ってきたのであった。

春風2回目の参加は1797(寛政9)/2/25の春饗で、8歳の長男権次郎(幼名-熊吉、号-景讓)を同伴していた。権次郎は、この3年前の1794(寛政6)/2/20春饗にも、春風の妻順に連れられ、同じく竹原在住の叔父伝五郎とともに2/8には広島に着帆して時祭に参列している(表1および表5)。この年10/20開催の「冬 時祭」と題した献立²⁵⁾には、贈り主名「竹原」の表記と伴に、向詰で用いられた鰯が春風からの贈答であると記録された。この時期、春水による家祭行事の構築は導入初期から発展期にあり²⁵⁾、供物献立の内容や贈答品の表記法の型式が定まっていたわけではない。そのため、全ての贈答品が網羅して記録されていたかどうかは不明であるが、この鰯が、後述の杏坪からの品羊羹と共に、贈答供物の初の記録となった(表1および表2)。その後、1798(寛政10)春饗に独活・銀杏・百合

根、翌年春饗に鴨が供物贈答されているが、春風が祭に参加した記録は見られず、これらは船便で送られたものと推察される。そして、1801(享和元)秋饗に、その後春風からの定番供物となる蓼鮓が初めて贈られた。既報^{19,20)}でも述べたように、蓼の抗菌性を利用した品は竹原から船便で時祭3～5日前に春水宅に届けられていた。

春風のその後の春水邸への時祭参加は、いったん途切れることになった。この間、1800(寛政12)年に、春水長男の山陽が脱藩事件を起こしたことから廃嫡され、春水の家督相続者として、甥の権次郎15歳、すなわち春風長男が嗣養子となった(1804(文化元)年)。これにより春風の家を継ぐ男子はいなくなり、後年花山家より、春風長女唯に婿養子尚平(小園)を迎えることになる^{4,7)}。そんな中、1811(文化8)/8/21秋饗には春風が参加していた。この前年8/26に、権次郎は杏坪に伴われ藩侯に随行して江戸に参勤交代し、翌年5/22に広島帰藩した。8/21の秋饗は、権次郎らが無事に参勤を終えたことを祖先に報告する目的もあり、春風も参じたと考えられる。記録に残っている春風の春水邸時祭への参加はこれが最後であった。その後、1813(文化10)年には竹原書院が類焼によって焼失し²³⁾、また1815(文化12)年には権次郎が没するなど、春風にとっては苦しい出来事が続いた。

『春水日記』^{12,13)} および『梅颯日記』^{13,21,22)}の記述から、上記調査期間36年間に、春風がどのくらいの頻度で春水宅を訪ねたかをみると、春水生前は年に1～2回ということが多く、春水没後は3回訪問することもあったが、全く訪れない年もあり、全体を平均すると1.3回であった。すなわち、春風の年に一度の春水宅訪問は、必ずしも時祭の日程に合わせて行なうことはならず、わずか3回程度にとどまった、ということであったようだ。

このように春風自身の時祭への参加は少なかったが、食品供物贈答は継続的になされ、春水没後に春饗での品が途絶えたものの、特に定番供物の蓼鮓を中心に秋饗での贈答品が目につく。蓼鮓のほか、複数回贈られた供物は、春饗で酒、山芋、椎茸がそれぞれ2回ずつ、秋饗で鮎が2回あった。

贈り主名は「竹原」と書かれることが最も多かったが、事前に春風が持参した際には(1802(享和2))字をもちいて「千齡持参」と表記されていた。この他、諱「惟彊」、あるいは「竹原春風館」と書かれていたのがそれぞれ1回ずつあった。春風没後も供物贈答は続き、嗣養子の「尚平」の名が贈り主として記されたのは、1842(天保13)年であった。既報²⁰⁾でも述べたとおり、尚平とその子喜六は春風没後、供物贈答のみでなく、時祭に参加することでも春水邸の時祭に関わっていくようになった。そんな中、春風宅からの供物贈答の贈り主が世代を超えて「竹原」と記されていたのは、竹原が頼家の郷里であり、そこで家業を継いだ春風一族を親族間では「竹原」と愛称していたと改めて認識することができる。

3. 末弟杏坪

春水の10歳年下の末弟杏坪(通称 万四郎, 字 千祺, 諱 惟柔, 杏坪は号, 1756(宝暦6)~1834(天保5))⁴⁷⁾は, 1787(天明7)年32歳の時に加藤恭子(15歳)を娶った後も春水宅に同居していたが, 6年後の1793(寛政5)/11/1に広島藩学問所の官舎多門に住まいを移した(表2)。贈り主として「御多門より」と書かれていたのは, この官舎名に由来する。また, 多門居住の期間に杏坪は, 広島城の北に位置する牛田山(現, 広島市東区牛田山)に別邸を建て(1808(文化5)/2/22), これを牛山園と称した⁷⁾。例えば, 1826(文政9)/11/30に供えられた慈姑は, 献立に「園中所産」とあり, この牛山園で収穫されたものとみられる。1810(文化7)年には京橋(現, 広島市南区京橋町)の屋敷に引越し(『春水日記』^{12,13)}, 『梅麗日記』^{13,21)}には京邸の表記), さらに2年後に鉄砲町(現, 広島市中区鉄砲町)に移ったので(同, 鉄邸), それぞれ贈り主として「京橋筋」, 「鉄坊町」と表記されていた。そして, 翌1813(文化10)には三次・恵蘇郡の代官の任に就いたが, 居宅はそのまま広島にあり, 次の年には国泰寺東の屋敷を拝領した。ここは, 国泰寺北側に位置した春水宅からみると南側に位置することから, 「南」, 「南邸」と称された。それまでの頻繁な引っ越しとは対照的に, 杏坪はこの南邸に14年にわたって居を構えた。この間, 江戸詰を繰り返して世子の教育に携わっていた儒官としての業務から, 藩の農政務に携わるようになり, 各地への出張や三次・恵蘇郡への出郡を頻繁に行った。さらに, 奴可・三上郡についても兼務するようになり, 最終的には1828(文政11)に三次町奉行となり, 三次に居住を移して赴任した。贈り主名「三次」は, この間のものであった。1830(天保元)年には74歳で隠居し, 同年, 白島(または白嶋, 現, 広島市中区白島)へ引っ越した。これは杏坪嫡子佐一郎への藩からの賜宅であった。その5年後の1834(天保5)年/5/10に移った真菰(現, 広島市中区国泰寺町)が杏坪最後の住まいとなり(菰邸), そこで7/23に没する。

藩命により頻繁に住まいを変えた杏坪であったが, 三次町奉行時代の2年間を除いては, いずれも広島城下におり, 兄春水宅には気軽に立ち寄れる近隣地域に居住していた。このためもあり, 杏坪からの食品供物贈答は, 親族の中で最も種類と数が多かった^{19,20)}。初出の供物贈答の記録は春風と同じく1794(寛政6)年の「冬 時祭」で, この時の供物羊羹には, 「万四朗手製」とあった。羊羹は春饗・秋饗共に杏坪宅からの定番供物であった^{19,20)}。羊羹以外で複数贈られていた品には, 春饗の鱒6回, 蕨と鰯がそれぞれ2回, 秋饗の松茸と新米がそれぞれ3回, 鮎と鮑がそれぞれ2回であった。これらのうち, 鱒が1822(文政5)~1825(文政8)に連続して贈られていたが, その他には特段の傾向はなかった。

供物食品贈答が親族の中で最も多かったのと同じように, 杏坪の春水邸時祭への参加も親族の中で最も多かった²⁰⁾。もともと春水宅に同居していた杏坪にとって, 時祭への参

加は習慣となっていたことであろう。また, 杏坪の妻恭子も新婚時に春水宅に同居していたことから, 家人として時祭に参加するようになっていた。春水邸を出て多門に移ってからは, 夫婦二人で前日から泊まりがけで準備を手伝い, 時祭当日を迎えていたことが『梅麗日記』^{13,21)}にたびたび書かれていた。1797(寛政9)には, 7歳になった息子佐一郎を含む家族全員で参加し, 1819(文政2)年以降になると, 孫も一緒に参加するようになった。杏坪宅からの一家打ち揃っての参上は, 近隣に住んでいたからこそ可能であったと言え, 弟家族が, 長兄の時祭を盛り立てていた姿をみることができる。

4. 姻戚

a. 娘三穂の夫進藤彦介

進藤彦介(広島藩士)は春水長女三穂の夫で, 春水の同僚藩士である。進藤家は, 広島藩主浅野家の広島移封以前の和歌山藩主時代から, 代々浅野家に仕える家で, 彦介が奥小姓次席, 側詰次席, 鍵奉行, 新組者頭を勤めた記録が残っている²⁷⁾。時祭供物贈答の贈り主名には「進藤(13回)」, 「進藤氏(3回)」, 「進藤彦介(5回)」, 「進藤吉之助(2回)」, 「吉之助(1回)」, 「進藤左介衛門(1回)」の6通りがみられた(表3, ③)。「吉之助」は通称と思われるが, この「吉之助」が表記(進藤吉之助および吉之助)されていたのは, 春水生前のみのもので, 没後は姓「進藤」を表記することが多くなった。春饗においては鮑やさざえといった海産物を, 秋饗においては柿を多く贈っていた点が特徴で, 夫婦揃って時祭に関わり, 三穂没後も供物贈答と時祭参加が続いたことは既報²⁰⁾で述べたとおりである。

b. いとこ民の夫駒井数馬

駒井数馬(広島藩士)は春水いとこ民の夫で, 民は数馬の二人目の妻であった。数馬の最初の妻は広島藩士加藤定斎の妹あやだが, 駒井氏も春水と同僚の藩士であり, あやと杏坪妻恭子とは姉妹であったことから, 駒井数馬と頼家は二重の姻戚関係にあった。駒井数馬が割奉行, 納戸奉行次席を勤めた記録が残っている²⁷⁾。時祭供物贈答の贈り主名には, 「駒井(7回)」, 「駒井氏(1回)」, 「駒井数馬(9回)」, 「数馬(1回)」の4通りがみられたが, 表記に特に傾向はみられなかった(表3, ④)。供物食品には動物性たんぱく質食材が多くみられ, なかでもひえ鳥の割合が高かった。進藤同様, 民没後も頼家時祭供物の贈答と参加は長きに渡って続いた²⁰⁾。

c. 養嗣子聿庵の妻皐の実家寺川家

寺川家は聿庵3人目の妻皐の実家で, 広島藩京都留守居役であった²⁷⁾。当主は定馬(~1816(文化13)/閏8/27没), 茂司馬あるいは茂次馬(以後, 茂司馬と表記。~1824(文政7)/11月上旬没), 養嗣子藤之進と続く。茂司馬が皐の父親か兄かは現時点では不明だが, 寺川家と頼家は家族ぐるみの交流があった²⁰⁾。寺川家からの時祭供

物贈答は5回（5種類6品）あり、昆布が2回贈られていたが定番の品はなかった（表3, ⑤）。皐が嫁ぐ以前には「寺川定馬」という贈り主名がみられたが、姻戚となつてからは「京 寺川」と表記されるようになった。しかし皐が嫁いだ2年後には茂司馬が急死、以後寺川家からの贈答は途絶えた。その一方で茂司馬の妻絹（皐にとっては母または義姉）による時祭準備の手伝いや時祭当日の参加は継続し、皐没（1834（天保5）3/26）後も続いた。絹の頼家への出入りは日常的に見られるが、これは皐の遺児東三郎（字子明、号誠軒、諱元啓、1829（文政12）～1894（明治27））⁴⁶⁾が6歳で母を失ったことから、頼家で成長する東三郎を気にかけての事と考えられる。時祭への関わりもその一環であったことだろう。時祭当日の頼家への訪問は養嗣子藤之進も同伴していたが、供物献立に表記された贈り主名は「きぬ女」や「おきぬとの（＝お絹殿）」であった。

d. 加藤定斎

加藤定斎（通称 三平、諱 友諒、号は定斎のほかには中瀬、1755（宝暦5）～1835（天保6））⁶⁾は、23歳の時に加藤静古の養子となった。加藤家は（図1）、静古の父十千が、広島藩儒の植田良背に推されて藩儒となった家で、その後、儒家として静古、嗣養子定斎、嫡子棕盧と続く。定斎は春水より10歳年下で、定斎の妹恭子が杏坪に、もう一人の妹あやが駒井数馬に嫁いだ。儒家庭どうし加藤家と頼家との交流は、静古妻で、『梅颯日記』^{13,21)}には加藤母公と表記される定斎、恭子、あやの母親がたびたび頼家を訪れるなど、深いものと推察されるが、時祭に関しては、参加回数も供物贈答も関わりが少なかった（表3, ⑥）。

5. 廃嫡子山陽

頼山陽（通称 久太郎および山陽、字 子成、諱 襄、1780（安永9）～1832（天保3））⁴⁷⁾が時祭供物贈答を行うのは、脱藩幽閉後に廃嫡の身となり、備後神辺（現、広島県福山市神辺町）の福山藩儒菅茶山私塾黄葉夕陽村舎の塾頭を経て、京都に居を構えてからのことである（表4）。贈答食品の内容については、既報²⁰⁾で詳しく述べたことか

ら、ここでは、贈答が行われた時間的経緯について考察する。山陽最初の贈答は春水の喪が明けた翌々年1820（文政3）/2/26で、京都在住10年目であった²⁰⁾。山陽は様々な品を京都から広島に頻繁に贈っており、その中には多くの食品が認められた^{13,21)}。時祭とは別に頼家で行われていた、毎月の朔望の拝供や各祖先ごとの忌祭日といった家祭に、これらの食品が供えられている²⁶⁾。その最初は、京都に出た年1811（文化8）/9/15の望日での干菓子と茶で、神辺から京都に向かった閏2/6から7ヵ月後のことであった。これ以降も、望日の供物に山陽からの菓子類（1812（文化9）/9/15、1816（文化13）/6/15および8/15、1817（文化14）/10/15）が認められる。忌祭日では、椎茸（1816（文化13）/9/6 二代妻妙喜忌祭日）が初出で、その後山陽が持参した鱈・茶・一時雨・菓子が春水の大祥忌（三回忌に相当、1818（文政元）/2/19）に供えられ、一時雨はさらに同年3/15の初代道円忌祭日にも供えられた。そして、翌年1820（文政3）の春水忌祭（2/19）に供えられた伊丹酒「白雪」と同じものが、5日後の2/26の上記時祭にも使われ、これが最初の時祭供物贈答になったのであった。

広島から遠く離れた京都からの贈答品は、広島到着のタイミングにより、様々な家祭に供物として供えられたわけだが、茶菓拝供の望日は月に1度の割合で巡り、そして山陽が送付した品には日持ちしやすい茶製品や菓子類が多くみられたことが合わさって、望日供物に山陽の品が多く用いられたのはうなずけることであった。次いで、1～2ヵ月に一度の割合で催される忌祭にも、山陽の供物贈答品がみられるようになった。一方、時祭は年に2度しかないの行事で、しかも日程が決まっているわけではなかったことから、山陽が贈った品がタイミングよく時祭供物になる機会はなかなかなく、山陽が京都に居を構えてからようやく10年目にその機会が訪れた、ということであったと考えられる。

その後、没年1832（天保3）までの12年間に、春饗で6回（9食品）、秋饗で3回（3食品）の時祭供物贈答が認められた。この間、1824（文政7）/閏8/28秋饗と1827（文政10）/2/27の春饗での贈答が認められなかったのは、それぞれ2/30～10/24と2/19～5/22に、梅颯が山陽を訪ねて京都に旅行していたことが原因ではないかと推察される。

6. その他親族

a. いとこ頼養堂

いとこ養堂（通称は千蔵）の父伝五郎は亨翁の弟で、頼家の家業であった紺屋を伝五郎が継いだ。伝五郎の死後、養堂は紺屋をたたみ、江戸に行った後広島に戻って、春水宅近隣の戒善寺近辺に居住したとみられる。このため、養堂からの供物贈答は「かいぜん」または「かいぜん丁」と表記されたが、「かいぜん」の漢字表記が様々な理由は不明である。「かいぜん丁」が『梅颯日記』に初めて表記されたのは1816（文化13）/8/24であり、それまで使われて

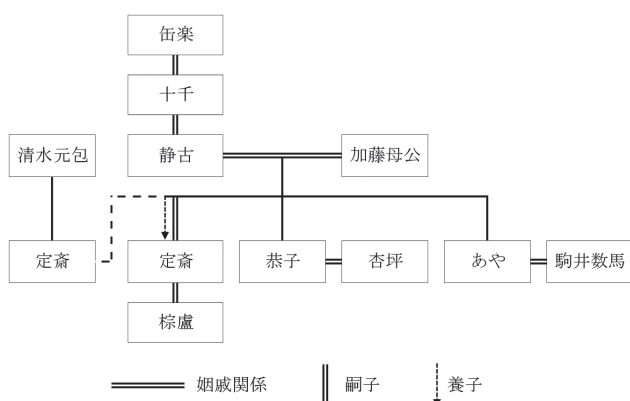


図1. 広島藩儒加藤家系図

いた通称の千蔵は、時祭供物贈り主名ではみられなかった。供物贈答品は、旬の野菜類と菓子類で²⁰⁾、秋饗ではすべてが菓子類であった。

b. 梅颯実家

梅颯の実家は大阪にあり、梅颯の父飯岡義斎(～1789(寛政元))は町儒者で、また町医者でもあった¹¹⁾。医師としての姓は篠田を名乗り、「篠田膏」で知られた人物であった¹¹⁾。義斎には女兒しかいなかったため(長女静子(=梅颯)と次女直子)、義斎弟の滄浪(伊助・貞蔵)を嗣養子とし、その息子剛三(鉄蔵・鉄二郎・存斎)、そして重五郎と続いた。しかしながら、剛三は1814(文化11)/7/15には亡くなり、篠田家からの時祭供物贈答(干蕪菁)は、その前年が最後であった(表5, ⑨)。遺児重五郎は祖母に育てられることになり、梅颯は京都の旅路の途中、1819(文政2)/3/9(京都旅行1回目往路)、1824(文政7)/4/8(京都旅行2回目往路)および9/5(帰路)にそれぞれ6歳と11歳の重五郎に大阪で会っている。しかしながら、1827(文政10)/7/21『梅颯日記』^{13,21)}の記述にあるように、篠田の家は無くなり、13歳の重五郎は義斎の神主(仏教の位牌に相当するもの)とともに、叔母頼の嫁ぎ先中井家(大坂懷徳堂預人の家系、頼の夫は中井碩果)に引き取られていった。碩果の父中井竹山は春水・梅颯の媒酌人でもあった。篠田重五郎の名は、中井木菟麻呂著「懷徳堂水哉館先哲遺事」の義金人名の中にみることができるが²⁸⁾、1836(天保7)/12/8に23歳の若さで没したため、飯岡家(=篠田家)は絶えることとなった。

c. 三原頼兼

1821(文政4)/2/29春饗に供えられた蒸菓子が「三原頼兼」からの贈答となっていた。この直前2/13～2/25に杏坪が三原に出張しており⁷⁾、『梅颯日記』^{13,21)}にもそのことが記されている。2/12「万四朗(=杏坪)、明日、三原へ出立之由、暇乞に来」、2/13「万四朗出立」と書かれ、2/23には杏坪の様子が手紙で知らされたようだ。そして、2/25「万四朗、夜、郡中より帰」とある。この時の三原出張の目的は定かではなく、また、「三原頼兼」が人の名か、あるいは地名かも不明であるが、この時杏坪が持ち帰った品が時祭供物に供えられたと推定される。

頼家の「頼」は、頼兼に由来する。戦国末期に備後国御調郡西野村頼兼(現、広島県三原市頼金町)に城を築いて、一帯を治めていた豪族の岡崎頼兼の孫が、春水の高祖父道円であった。春水父亨翁の時代から、この頼兼という、一族のかつての居城の場所とそれを名とした祖先を尊び、その一字「頼」を取って姓としたわけである。

「三原頼兼」による贈答の蒸菓子の詳細は不明だが、上記の関わりから、親族関係者からの贈答の可能性のあることとして、本稿に加えておく(表5, ⑩)。

さいごに

儒家家祭の中で最も重要とされる時祭について、江戸後期の儒者頼春水宅で行われたものを対象に、親族らの供物食品贈答と祭への参加状況を経時的な視点から探った。最も近い間柄と言える二人の弟(次弟春風および末弟杏坪)からの供物贈答は早い時期から始められ、次世代にも継承されて、弟達が長きにわたって関っていたことが認められた。祭への参加は、準備や後片付けをも含むもので、特に、春水宅近隣にいた杏坪の関わりが大きく、これも次世代に継承されていた。婚姻により親族となった間柄からも、供物食品贈答は行われたが、頻度の高い婚家とそうでない場合が認められた。贈答頻度の高かった家は、祭当日に頼家を訪問する頻度も高く、嫁いだ娘や姪が没した後も、時祭協力者としての関係性が続いた点は共通していた。京都の廃嫡子山陽からは、多くの食材が広島に送付されていたが、親族の中では最も遠方であったこともあり、広島到着のタイミングにより時祭供物の機会を得た品は限られていた。いとこ宅、妻梅颯実家からも事情の許す限り供物贈答がなされていた。

念願であった武家階級への復帰を果たし、儒家として家祭行事の運営に力を注いだ春水が主宰する時祭は、多くの親族が関わることで執り行われていたことを確認することができた。

謝 辞

資料閲覧に関しまして、頼山陽史跡資料館(広島県広島市中区袋町5番15号)には多大のご配慮をいただきましたことを深謝いたします。

文 献

- 1) 杉の木資料(頼宗家に伝わる文書資料を指す)。頼山陽史跡資料館所蔵。
- 2) 小竹佐知子・大久保恵子(2002)。頼家献立資料の分類と解説。山梨県立女子短期大学紀要, 35, 41-52。
- 3) 小竹佐知子・大久保恵子(2008)。「頼家時祭献立」ならびに「その他の饗応献立」の翻刻と解説。お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢, 10, (10) 1-15。
- 4) 頼惟勤。頼氏先祖資料。(頼惟勤氏よりの複写)
- 5) 頼古媒。春水翁・春風翁・杏坪翁・山陽翁・聿庵翁・支峰翁・三樹翁略年譜。杉の木資料。(頼惟勤氏よりの複写)
- 6) 玉井源作(1976)。広島県人名事典(芸備先哲伝)。歴史図書社、東京、pp.577-598、付録 pp.16-17。
- 7) 木崎好尚(1933)。頼杏坪先生年譜。山陽会。
- 8) 財団法人頼山陽記念文化財団(2008)。頼家の味－江戸時代の食文化－。pp.33-37。
- 9) 加地伸行(1994)。沈黙の宗教－儒教。ちくまライブラリー、東京、pp.89,128。

- 10) 日本大辞典刊行会(1974). 日本国語大辞典6. 小学館, 東京, pp.635.
- 11) 安藤英男 (1982). 考証頼山陽. 名著刊行会, 東京, pp.17-25.
- 12) 頼春水. 頼春水日記. 杉の木資料, 頼山陽史跡資料館所蔵. 一部はマイクロフィルムの形でお茶の水女子大学ジェンダー研究センターに所蔵.
- 13) 木崎愛吉・頼成一共編(1982). 春水日記・梅颯日記. 頼山陽全書, 国書刊行会.
- 14) 小竹佐知子・宮本有香 (2009). 江戸時代後期の儒学者頼春水が残した『春水日記』における食物関連記述, 日本獣医生命科学大学研究報告, 58, 100-131.
- 15) 皆川美恵子 (1997). 頼静子の主婦生活『梅颯日記』にみる儒教家庭. 雲母書房, 東京.
- 16) 頼春水. 家祭 年中行事控. 杉の木資料 (頼宗家 10代惟勤氏分類番号 707-001). 頼山陽史跡資料館所蔵.
- 17) 小竹佐知子・大久保恵子 (2002). 「頼家家祭年中行事控」の翻刻および解説. 山梨県立女子短期大学紀要, 35, 53-56.
- 18) 小竹佐知子・大久保恵子 (2009). 頼家『家祭 年中行事控』の内容および食品. 日本家政学会誌, 60, 139-152.
- 19) 小竹佐知子・大久保恵子 (2013). 頼家『時祭供物献立』における到来食品の内容とその特徴. 日本家政学会誌, 64, 663-673.
- 20) 小竹佐知子・大久保恵子 (2014). 頼家時祭供物における親族からの食品贈答. 日本家政学会誌, 65, 309-322.
- 21) 頼梅颯. 頼梅颯日記. 杉の木資料, 頼山陽史跡資料館所蔵. 一部はマイクロフィルムの形でお茶の水女子大学ジェンダー研究センターに所蔵.
- 22) 財団法人頼山陽記念文化財団 (2002 ~ 2012). 雲か山か. 62号 ~ 96号.
- 23) <http://takeharashoin.jp/library.html>
- 24) <http://www.raisanyou.com/>
- 25) 小竹佐知子・大久保恵子 (2011). 頼家特殊供物献立における使用食品と特徴. 日本家政学会誌, 62, 795-804.
- 26) 小竹佐知子・大久保恵子 (2009). 『梅颯日記』にみる家祭行事と供物食品. 日本家政学会誌, 60, 381-399.
- 27) 高橋新一 (1990). 『芸備輯要』人名索引, 154-155, 62, 117.
- 28) 釜田啓市 (2000). 中井木菟麻呂『懷徳堂水哉館先哲遺事』第五・第六・第七翻刻. 懷徳堂研究, 第1號, 101-143.

The Changes of Food Offerings Presented from Relatives and Participation for Confucian Seasonal Rites in Rai Family

Sachiko ODAKE¹⁾ and Keiko OKUBO²⁾

¹⁾ Food Engineering Laboratory, Nippon Veterinary and Life Science University

²⁾ Otsuma Women's University (the former)

Abstract

Shunsui Rai (1746-1816), a Confucian of the Hiroshima feudal clan in the later Edo era, held Confucian seasonal rites (33 times in both spring and autumn) and occasional rites (9 times in irregular seasons). Food gifts used as offerings for the rites were presented from relatives, consisted of Shunsui's two brothers (Shunpû and Kyôhei), an uncle (Yôdô), a disinherited son (Sanyô), and five marriage-relatives. Frequency of presents and varieties of food depended on each relative, and habits for sending offerings for the rites were succeeded by the next generations in the family of Shunpû, Kyôhei, Yôdô, and Sanyô. Some relatives helped arrange for the rites one day before and it was also succeeded by the next generations. Two marriage-relatives continued to present and participated the rites even after the death of the wives.

Key words : confucian household rites, seasonal rites, offering menu

Bull. Nippon Vet. Life Sci. Univ., 63, 27-39, 2014.